

## 国内研修 研修成果報告書

### I. 研修の概要

#### 1. 研修先①：NPO 法人 子どもの里

##### 1-1 研修先の団体について

大阪府西成区にある、子どもの遊びと学び、そして生活の場である児童福祉施設「子どもの里」を運営する NPO 法人。現在、大阪市留守家庭児童対策事業（学童保育）、小規模住居型児童養育事業（ファミリーホーム）、大阪市地域子育て支援拠点事業（つどいの広場）に加えて、自主事業として、緊急一時保護・宿泊所、エンパワメント事業・訪問サポート事業（子ども夜回り）、中学生・障がい児居場所事業などを行う。

##### 1-2 研修の概要

子どもの里から徒歩 5 分程度の所にある、子ども達の遊び場として開設されたプレパークにて、子どもたちと交流の時間を持った。その後、施設内で子ども達と交流しつつ、施設内での子どもの過ごし方や、子どもとスタッフの関わり方について視察を行った。その後、館長の荘保共子さんからレクチャーを受けた。

#### 2. 研修先②：NPO 法人 釜ヶ崎のまち再生フォーラム

##### 2-1 研修先の団体について

大阪府西成区において、支援団体や住民組織同士が意見交換できるフォーラムやワークショップを開催し、様々な諸団体が共通のまちづくりのビジョンを持ち、それを事業化していくための活動を行う NPO 法人。また、釜ヶ崎のまちをガイド付きで回る「釜ヶ崎研修ツアー」や、日雇い労働者の新たな住まいとしての「サポータティブハウス」の運営などを行う。

##### 2-2 研修の概要

釜ヶ崎のまち再生フォーラムが実施している「釜ヶ崎研修ツアー」に参加した。まずは事務局長のありむら潜さんからあいりん地区（釜ヶ崎）の現状と、釜ヶ崎におけるまちづくりについてレクチャーを受けた。その後、あいりん地区（釜ヶ崎）の町を歩きながら、日雇い労働の現状やそれを支援する団体などを視察した。その後、サポータティブハウスにて、そこで暮らす二名の当事者の方から体験談などのお話を伺った。

#### 3. 研修先③：NPO 法人 暮らしづくりネットワーク北芝

##### 3-1 研修先の団体について

大阪府箕面市萱野地域にある北芝地区において、住民が主体となったまちづくりを推進する中間支援機能を持った NPO 法人。地域通貨、コミュニティレストラン、まちづくり協議会の設立や運営などを行う。萱野市人権文化センターの指定管理者として行政の業務委託を受けると同時に、生活困窮者自立支援事業、パーソナルサポートセンター「あおぞら」

などの事業を展開している。

### 3-2 研修の概要

二日間にわたって研修を行った。一日目は、暮らしづくりネットワークの職員から事業についてレクチャーを受け、NPO 法人が指定管理を行っている「らいとぴあ 21」（萱野中央人権文化センター）内の視察を行った。二日目は、事務局長の池谷啓介さんからレクチャーを受け、その後、NPO が北芝地区で展開している事業を、実際に歩きながら視察した。らいとぴあ 21 内にある、子どもの食の支援の場としての役割を持つ「ぴあ食堂」で昼食を食べ、子どもたちと交流した後、若者の居場所としてのパーソナルサポートセンター事業である「あおぞら」を視察し、利用者と交流した。

## II. 研修を通して得た気づきや学び

### 1. 日本の最先端

今回、大阪府西成区の「釜ヶ崎」と呼ばれるあいりん地域で活動する二つの NPO 団体と、大阪府箕面市の「北芝」と呼ばれる萱野地域で、様々な相談事業やまちづくりの活動を行う三つの NPO 法人を訪問・視察した。

この二つの地域にはある共通点がある。それは、どちらも「課題の宝庫」であると同時に、「日本の最先端」であるという点だ。

まず、「釜ヶ崎」と「北芝」という地域は、どちらも強い偏見や差別、貧困などと戦ってきたまちであり、そして現在進行形で数々の課題と向き合っているまちである。

釜ヶ崎は、日本最大の日雇い労働者の町と呼ばれ、その歴史は明治時代にさかのぼる。そして今日までの日本の経済成長は、釜ヶ崎の日雇い労働者によって支えられてきたといっても過言ではない。国は経済発展のために、日雇い労働者という「便利な」労働力を利用した。日雇い労働は、働き手が必要な時には大量に雇用し、必要なくなればいつでも解雇できる、さらにケガをしても保障しなくていいので危険な重労働も押し付けられる、という手軽な「使い捨て労働」なのである。不安定な就労によって貧困から抜け出せない多くの労働者が生きる場所が釜ヶ崎である。しかしこの日雇い労働者たちが日本の経済を回しているにも関わらず、彼らは「怠け者」として世間から虐げられ、釜ヶ崎は「貧困のまち」として人々の偏見や差別を受けている。また、北芝は被差別部落地域であり、この地域も長年、強い差別や貧困に追いやられてきた。現在も、高齢の住民の多くは非識字であったり、若者も結婚の際に差別を受けてしまったりするという現状がある。また、長年差別で苦しんできたゆえの、住民の閉鎖的傾向や、子育て放棄、高校中退など様々な課題を抱えている地域である。

貧困や様々な偏見や差別にさらされ、山積する課題を抱えているこの地域を、ある人は「日本の最底辺」と呼ぶ。しかしこの地域は決して最底辺ではなく、そこで行われている取組みはむしろ「日本の最先端」なのである。釜ヶ崎や北芝という地域は、これから日本全体が直面していく問題がどこよりも早く顕在化している地域であるといえる。そして、

その問題に対してまちづくりの視点で課題解決に取り組む、「日本のモデルケース」といえる活動を行っている地域なのである。

「日本のモデルケース」としての取り組みの一つとして、子どもの里が中心となっている「あいりん子ども連絡会」を例にあげる。「あいりん子ども連絡会」とは、あいりん地区（釜ヶ崎）の病院、小中学校の先生、スクールソーシャルワーカー、保育園、民生委員、子どもの里スタッフなど、子どもやその家庭に関わっている様々な機関が月に一度集まり、話し合う会議である。この話し合いでは、「子どもの最善の権利を守る」という原則のもと、各機関が持っている情報を照らし合わせ、それぞれの視点をもとに子どもとその家族の現状をアセスメントし、支援方法を考えていく。つまり、子どもとその家族をチームでアセスメントし、地域で包括的にサポートしていく仕組みである。日本の多くの地域で、家庭が抱える貧困は表に見えてこないことがほとんどである。本当は助けが必要であるにも関わらず、それを表出しにくい社会なのだ。それによって、子どもだけ、兄弟の中の一人だけ、もしくは親だけという単体の状況は表面化したとしても、その家族全体の現状は見えてこず、本当に必要な支援につなげることができないというケースが多い。しかし、あいりん地区はある意味で昔から「貧困」が顕在化されていた。このあいりん子ども連絡会の仕組みは、あいりん地区だからこそ、その必要が理解され、導入された仕組みであり、これからの日本の児童福祉のモデルケースとなる、という風に子どもの里館長の荘保さんは仰っていた。

## 2. 「支援者」としての姿勢

また、今回訪問した三つの団体にも、様々な共通点があると感じた。各団体がそれぞれ取り組んでいる活動はもちろん違うが、根本には共通したものが流れているように思った。その共通点のうちの一つが、「支援者」と呼ばれる側の人達の視点と姿勢である。それは、「このまちを誇りに思う」という思いと、そこに住む人と「共に生きる」という姿勢である。

「このまちを誇りに思う」という思い、これは言い換えれば「このまちには希望がある」という確信である。今回訪問した「釜ヶ崎」そして「北芝」と呼ばれる地域は、どちらも多くの課題を抱えている町である。しかし、今回の研修で出会ったNPOのスタッフは、これらの地域の中に、その地域が持っている確かな可能性を見出し、そこに住む人々の力を最大限引き出そうとしていた。

たとえば、暮らしづくりネットワーク北芝では、住民の「つぶやき拾い」を重視し、誰かの「もっとこうだったらいいのにな」というつぶやきを、持続的な支援方法として形作り、事業化していくという手法を用いている。そして、そのために住民同士が意見を言い合えるワークショップを非常に大切にしていた。また、地域に住んでいる「普通の」中高生の若者たちをまちづくりの担い手として巻き込んでいることも特徴の一つである。自分の意見が反映され、自らが主体者となって進められていくまちづくりは、「このまちを、さ

らに良いまちにしていくにはどうしたらいいだろうか」「自分には何ができるだろうか」という思いを住民の内に伝染させていく。そしてそのような住民が増えていくことが、まち全体の強みとなっていくのではないかと感じる。

また、今回の研修を通して、「支援する者」と「支援される者」という上下のある関係性ではなく、同じ目線で「共に生きる」支援の在り方を学ぶことができた。

地域に住む住民同士の「お互いに支えあう」という相互扶助の関係性は、おそらくどの地域においても重視されやすい。釜ヶ崎のサポータティブハウスは、就労支援やその他の相談ができる体制を備えた住宅施設で、野宿や簡易宿泊所で生活していた人が暮らしている。このサポータティブハウスでは住民間の交流スペースがあり、まさにそこに住む住民同士の関係性が、彼らのお互いの人生の質を向上させていた。

しかし「支援者」と呼ばれる立場にいる人は、そのような住民同士の相互扶助という関係性が持つ強みを認識してサポートすると同時に、「支援者」も、実はその「支援している人達」によって支えられ、生かされているという事実気づくことが大切であると感じた。子どもの里の館長である荘保さんは、「この子どもたちが私を生かしてくれている。この子達から私は生きる力をもらっている」と仰っており、暮らしづくりネットワークのある一人のスタッフの方も、「Aさん（若者の居場所：サポータティブハウス「あおぞら」の利用者）にいつも助けられ、支えられている」と、言葉で表現していた。

一人の生身の人間同士が、互いに影響を与えあい、互いにエンパワメントしているということ。お互いに、生かし、生かされながら歩んでいるということ。「支援者」と呼ばれる立場に立っていたとしても、一人の人間としてそれを忘れないということは、実は非常に重要なのだと感じた。将来もし自分が「支援者」としての立場にたった時にも、この気づきを心にとめておきたいと感じる。